

「語り」による母親の自己統合 要約

(「社会事業研究」第50号の原稿)

武 部 明 子

1. 本研究の背景と目的

人間とは、本来不完全なものであるにもかかわらず、人々は現代社会の大きな潮流である上昇志向の波に翻弄されて自己分裂状態に陥り、自己(人間)の本質的価値を見失いつつある。人間が本質以外の価値を生きようとするとき自己不一致を招き、それは単にひとりの人間の問題にとどまらず、社会全体の成熟度に大きく影響するといえるだろう。

本研究は、生命の誕生と育みを担う母親たちを対象に、子育てを通して自らの生き方を問い直す人々の姿から、人間にとって本質的な課題である「自己統合」に至るプロセスを、特に「語り」に焦点をあてて検証する。母親の自己統合を援助することは、子どもの成長にとって最も大切な人的環境を整えることになり、それは究極的に子どもの自己統合(人格的成長)を助けることでもあると考えるからである。

本論文が目的としているのは、第一に自己不一致の要因となる育児ストレスについて、現代の母親たちが子育てにおいて抱えている不安や困難を調査によって把握し、可視化すること。第二に、それらのストレスが育児にどのような影響を与えているか、特に負の関連性を明らかにすること。第三に、そのような困難状況において、母親の自己統合に貢献していると考えられる「語り」の場と対象、その効果について検証し、明らかにすること。第四に、子育ての困難に直面している母親たちが、「虐待」という悲しい事態に陥る以前に、育児不安やストレスを早い段階で解決するために必要としていること、また妨げとなっていること

を知り、具体的支援の方法を模索することである。特に生活場面における「語り」を念頭に置き、セラピーなど特化された専門性による支援ではなく、日常生活の延長線上にある「語り」に注目し、その場をどのように保障できるか、またそのための意識化をどのように行えるかに焦点を置いて考察したい。

2. 調査

*インタビュー調査

アンケート調査の質問紙を作成する前に、子育て中の母親3名から現在抱えている育児ストレスやその解消方法について聴き取り調査を行なった。この調査に使用した質問項目と聴き取り後の逐語記録は本人の承諾を得て、そのまま補足資料として巻末に添付した。

*アンケート調査概要

- ①調査期間…2009年5月末～6月初め
- ②調査場所…全国6か所の幼稚園・保育園
(内訳：幼稚園3園／保育園3園)
- ③調査対象…就学前の乳幼児の子育てをしている母親605名
- ④調査方法…質問紙調査(A3両面)
質問紙配布数：605枚
質問紙回収数：433枚
回収率：約71%
- ⑤調査項目…Ⅰ. 子育ての感じ方 Ⅱ. ストレス要因と行動 Ⅲ. 子育て環境
Ⅳ. 「語り」について Ⅴ. 母親の成育環境 Ⅵ. 育児観 Ⅶ. 理想

の母親像

⑥分析方法…エクセルにデータ入力後、集計結果、統計等をグラフ化した。

関連項目については、ピアソンの相関係数を用いて相互の関係性を確認した。

自由記述回答については、テキストマイニング、及びKJ法を試み、分析を行なった。

⑦倫理的配慮…アンケート調査を作成するにあたり、母親への心理的負担をできるだけ少なくするように文章を吟味した。その上で複数の専門家によってアンケート項目、及び説明文を吟味していただいた。また、守秘義務、および個人情報の管理に関する遵守項目を依頼文書に記載し、同意を得られた親に対してのみアンケートを実施した。

裏返しのような母親像が数多く書かれていた。すべての回答に当てはまるものではないが、ストレス負荷は、自分の弱い部分に作用していると推察でき、そう考えると、ここに書かれた母親像は、「現在の自分が実現できていない母親としての不完全な姿」とも捉えることができる。

笑顔で接することができない、小さなことでイライラする、話を聴いてあげられていない等、「母親の理想像」には逆説的に「母親の現実」が映し出されている。筆者が現場で感じた母親の自己評価の低さは、前述した母親イメージに起因するところが大きいと考えている。

また「いつも変わらない母親」であることが、明らかに良い母親のイメージと結びついている。母親たちは、変わらずに保ちたい何かを子育ての葛藤のなかで感じ取っているといえる。表層的なことに一喜一憂することのない自己の揺るぎない礎とは何なのか、母親たちは子どもを通して「変わらない自己」という本質に目を向ける機会を得ているのである。

3. 調査結果と考察

***理想と現実のギャップにみられる育児ストレス**
ストレス要因の第1位は「思うようにならない現実に対する苛立ち」、第2位は「母親としての自信のなさ」であった。「理想の母親像」（自由記述）には、ストレス要因として記述された内容の

***育児ストレスと子育ての負の関連性**

今回の調査で「育児不安尺度」「FR行動（怯えたような／怯えさせるような行動）」「日常的離人尺度」を用いて行なった結果から考察できる負の関連性について以下に述べる。

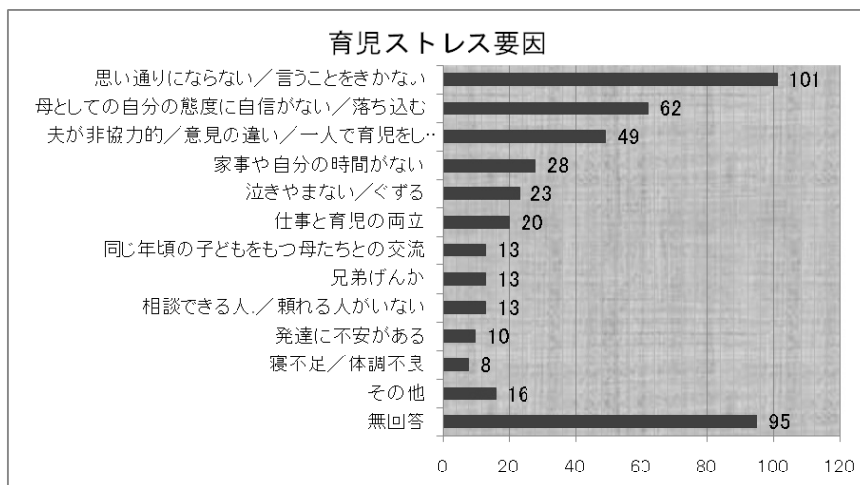


図1 育児ストレス要因

- ①ストレスと結びついた負の行動として顕著なのがFR行動であり、日常的離人尺度との間には有意な相関 ($r=.32, p<.01$) が認められている。これは育児ストレス時にFR行動をとる母親の中には、日常的に離人感をもつ人が少なからず存在していることを示しており、解離的傾向の現れ(統合感の希薄さ)と捉えることができる。
- ②虐待意識をもっている母親とFR行動との間には中程度の有意な相関 ($r=.44, p<.01$) が認められ、子どもに対する行動がFR行動として出現する可能性の高さを示唆している。
- ③中核的育児不安と自己否定的評価との間には中程度の有意な相関 ($r=.48, p<.01$) が見られる。これは自分の育児能力やしつけの方法等に不安を感じている母親たちの自己評価が低いことを表している。

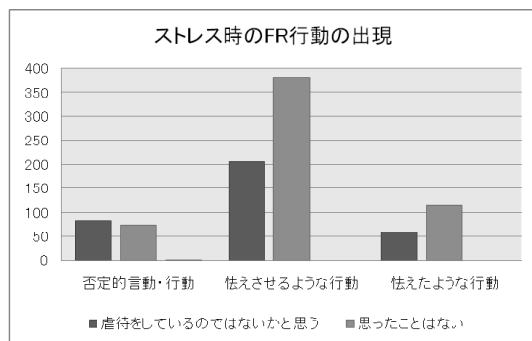


図2 ストレス行動時のFR行動の出現

- ④自己評価の低さは子どもへのFR行動 ($r=.49, p<.01$) や虐待意識 ($r=.33, p<.01$)、セルフコントロール ($r=.39, p<.01$) など、多くの部分と有意な相関が認められており、母親の低い自己認識が不適切な養育行動と密接に関係していることを示している。

*「語り」の対象と場

ストレス場面において「語り」が果たす重要な役割は、以下の調査結果からも明らかになった。

また、幼稚園・保育園の先生に話したいという希望を持っているにもかかわらず、実際にはそれが困難な現実があることもうかがえた。その理由は明確でないが、親子が毎日利用する幼稚園・保育園の場が貴重な「語り」の場になり得ることは確かであろう。原因を明らかにして、「語り」を受けとめる“人と場”を創り出していくことは、生活場面の延長線上にある支援として重要な選択肢となる。

フォーマル、インフォーマルを問わず、語りの場と対象を確実に得られるか否かは、母親たちの心理的なサポートへの影響が大きい。“深刻で重大な問題”でなければ門をくぐるできないと感じさせる専門機関の敷居の高さが、早期であれば解決できた問題を深刻化するまで置き去りにする要因になっているとはいえないだろうか。

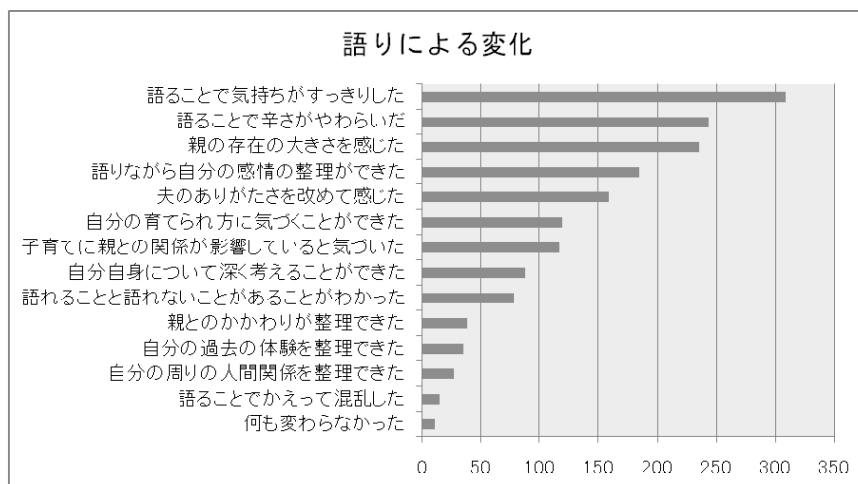


図3 語りによる変化

種々の専門機関についても、どのような方法で、いかに敷居を低く利用しやすい条件で確保することができるかが、今後の支援の課題となると考えている。

＊パートナーシップ

インタビュー調査において語られた子育ての悩みを振り返ってみると、その背景には夫婦のコミュニケーションの問題や育児・教育に関する価値観の違いなど夫婦間のギクシャクした状態像があり、それが子育てに影響を与えているという実態があることを再認識した。質問紙調査とは異なり、それぞれがパートナーとの関係で抱えている問題を個別に聴き取ることができたおかげで、パートナーシップと子育ての関係を新たな課題として認識することができた。また、育児不安や子育ての困難は避けられないとしても、母親にとって最も自分自身を分かち合いたい存在であるパートナーへの語りは、困難に向き合う力となっているというもう一つの事実も確認した。このパートナーへの「語り」もまた、自己の不完全性の受容とつながり、母親が自己統合へと導かれる役割を担っている。

4. 子育てにおける具体的支援の提案

これまでの調査結果等を踏まえ、子育て中の母親たちが安定した気持ちで子どもと向き合い、自分自身の生き方をより内奥の声（本質的自己からの呼びかけ）に近づくために可能な支援を具体的に提案したい。

＜母親への直接支援＞

①幼稚園・保育園におけるチャイルドソーシャルワーカーの常駐

チャイルドソーシャルワーカーを園に常駐させ、母子にとって日常生活の延長線上にある幼稚園・保育園において、母親たちが話したいときに自然な形で話を聴いてもらったり、相談できる環境（語りの場）を確保する。

②「子どもの人権」「母親の人権」の意識化

近年、虐待等で子どもの人権についても意識が高まってきてはいるが、幼稚園・保育園では、当事者性が強いいためか、ほとんど話題にされることはなかった。しかし、今後はこれらの啓発も不可欠であろう。人権感覚も子育て観と同様、親の意識から世代間伝達していくと考えられるので、日常生活の随所にあふれている人権の芽について、具体的に意識化を図っていくことも必要なアプローチである。

③パートナーシップの充実に対するアプローチ

夫婦のため、父親のための集い、マリッジエンカウンターなど、より良いパートナーシップを生きるための集いの企画・広報・開催を幼稚園、保育園において行なうことも支援の一つであると考えられる。特に、父親に対して育児参加を求める以前に、パートナーに対する信頼と理解を深められるような支援を行ない、結果として子育てにおける父親の必要性や育児参加の重要性を理解できるような機会を提供する必要がある。

④葛藤処理のスキルを学ぶ場の提供

自己評価の低い母親たちに対するアプローチとして、母親が子育て中に感じる否定的感情や否定的体験に対して、自分を責めたり戸惑ったりせずに着いて対処できるよう、葛藤処理のスキルを学ぶ機会を提供する。

⑤日常生活場面への支援

幼稚園・保育園は、子どもの養護の一環として、現段階でハイリスクと判断される母親（虐待の兆しや精神疾患等）に対して、他の機関と連携しながら副次的に日常生活支援を行なうことも視野に入れた体制をつくる。

＜職員・制度などに対する間接的支援＞

①保育士、幼稚園教諭の専門性の向上

②幼稚園・保育園と保健師の連携

③保育所保育指針の実現と幼稚園教育要領の見直し（教育と福祉の接点）

謝 辞

本論文の執筆に際して、貴重なご助言やご指導をくださった日本社会事業大学の藤岡孝志先生、また調査結果の解析にあたり、丁寧にご指導くださった竹内幸子先生に深く感謝申し上げます。また、調査に快くご協力くださいました幼稚園・保育園の園長先生ならびに職員の皆様、ご回答いただいた大勢のお母様方お一人おひとりに心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

引用・参考文献

柏木恵子2008「子どもが育つ条件—家族心理学から考える」岩波新書
鯨岡峻2002「〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ」[関

係発達の見点から]」NHKブックス

手島聖子、原口雅浩2003「乳幼児健康診査を通した育児支援：育児ストレス尺度の開発」福岡県立大学看護学部紀要 1, P.15-27

豊田史代・岡本祐子2006「育児期の女性における『母親としての自己』『個人としての自己』の葛藤と統合—育児困難との関連—」広島大学心理学研究第6号

橋本やよい2001「現代社会と母親の病い」（講座心理療法第8巻「心理療法と現代社会」）岩波書店

藤岡孝志2008「愛着臨床と子ども虐待」ミネルヴァ書房 他